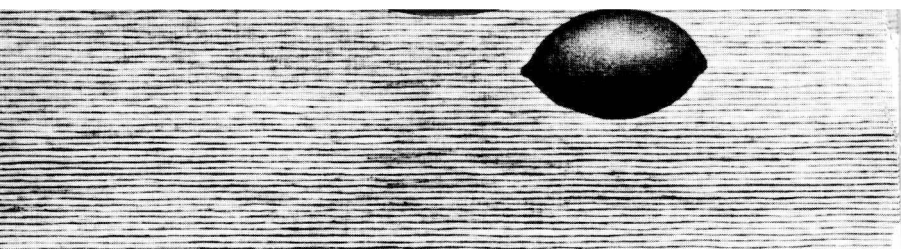


田久保英夫
触媒



文藝春秋

© Hideo Takubo. 1978

触 媒

1800円

昭和五十三年六月三十日 第一刷

著 者 田久保英夫

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

郵便番号 (102)

東京都千代田区紀尾井町三
電話 (〇三) 二六五—二二一

印刷所 精興社

製本所 加藤製本

製函所 加藤製函

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

《目次》

第一章

5

第二章

57

第三章

99

第四章

149

第五章

189

第六章

245

第七章

335

第八章

395

あとがき

469

触

媒

装
画

浜
口
陽
三

第一章

障子を開けると、部屋には儀式の支度がすっかりできていた。燦^{くら}んだ北山杉の床柱のわきに、薄紅と白の菊が溢れるほど生けられ、その生薬^{しょうやく}のような匂いが、耕介の鼻にきた。

十二畳の客間に、繻子の座蒲団が床の間ぎわから縦に三つずつ、下座に二つ並んで置かれ、彼は咄嗟に自分がどの席についたものか、迷った。すると、うしろから母の栄子が、そっと背中を押すようにすりぬけて行き、両手に抱えた大きな紫の袱紗^{ふくさ}包みを、床の間へ置いた。そしてその手で、すぐ袱紗を剥ぎとった。

すこし慌ててゐるな。耕介が母親の小豆色の着物の肩が細かく動くのを見おろしていると、相手は急に振りむいて、「さあ」と一番上座の蒲団を眼でさした。彼はそこへ坐ったが、胡坐^{あぐら}をかくわけにいかないので、仕立ててまもないダーク・スーツのズボンが腿を締めつけた。この衣服の感触は、何か弱い女をいじめているようで、落着かなかった。

彼の視覚のなかで、真紅の尖ったものがちらちら動いた。その尖端は白い幾つもの襷のなかへ切りこんでいた。真紅は襷のおくへ隠れ、また二本の線に分れて現れた。そこへ栄子の指がどこか用心深く、優しい動作で触れた。

彼は母親が白木の片木盆^{へぎぼん}を、掌で何度もおしているのに気づいた。袱紗をはずした盆の上に、真紅で縁どられた目録や、金銀の水引きのかかった長熨斗^{ながおし}などが、一面に並んでいた。そんな派手やかな飾りのなかで、スルメの足の束が片木盆からだらりと垂れているのが、妙に生臭く見えた。彼は二三日前、母と長谷の妻の春子がこれを準備した時、自分がもの珍しく眺めた目録の中身を思い出した。扇子の「末広」や「長熨斗」はいいとして、スルメは「寿留女」、鏝節は「勝男節」、こんぶは「子生婦」とあるのに、つい笑ってしまった。やはり水引きのついた包みに、金包みというのがあり、母は春子と相談して、なかへ縁起の数にも合う八十万円を入れた。

「あら、もうよろしくて？」

障子をがたがた鳴らして、春子がいってくると、生真面目な顔で、床の間の栄子に手をかし、片木盆をわきの方へ寄せた。それから部屋を見廻し、「あら、お座蒲団、ひとつ多いわね。」と、彼の並びの座から一枚無造作につかんで、また廊下へ出ていった。うす藤色の留袖に盛装しているくせに、動作はひどく乱暴だ。

耕介は母親が自分のとなりに坐り、まだ落着かなそうに、身じろぎをする気配を耳にした。彼自身、これから何か改まって、芝居がかったことが始まる予期で、緊張にひきこまれまいとした。しかし、その抵抗は愉快ではなかった。たぶん、敦子もそうだろう、と思った。先週、この長谷家で会う段取りを打合せた時、どこか冷笑するように肩を竦めたのを思い出した。こんなやり方も結納のまだ略式だというが、要するに、敦子の父親が大げさに人を集めるのが好きなのだ。そ

れとも、何か自分を試すつもりなのか。だが、どんな儀式の粹をはめても、結びつくものは結びつくし、だめなものはだめだろう……。

一瞬、廊下のむこうで、春子の小声が聞えた、と思った時、もう何人かの足音が近づいて、障子が開いた。耕介の視野に、最初に黒い大きな略礼服の影が入ったが、それは敦子の父の克三だった。克三は臉の厚い肉のおくで眼を柔らげて、こっちへ頷くと、軀を退り、うしろからきた敦子を先へ通した。更につづいて姉の岐代が、こちらと同じ袱紗に包んだ片木盆を持ち、附添っていた。

彼はむこう側の座蒲団のうしろを、敦子の白い足袋と訪問着の杏色の裾が、重そうに畳とすれ合つて通るのを、眼に入れた。敦子の着物姿を見るのは初めてだった。敦子はすこしも硬くなっている面持がなく、神妙に真向いに坐った。彼はその女が、先週、指についた車のオイルを神経質にこすり落しながら、この日の打合せに肩を竦ませた相手か、と疑った。それほど、敦子は悪びれず、氣持よさそうに盛装していた。

一番しまいに、春子と一緒に媒酌人の長谷が入ってきて、岐代に、片木盆をあそこに置くようにと、床の間の正面を指した。

岐代はかなり上ってしまったのか、小柄な肩が揺れるような歩き方で、正面へ行き、両膝をついたが、ようやく盆をこちらの結納品と揃う位置において、袱紗を丁寧にたたんだ。それから長谷夫妻が、床の間に向き合う媒酌人の座に坐るのを見とどけると、ちょっと会釈し、自分は父親のとなりの末座に坐った。

その瞬間、沈黙に陥りかけた。すると長谷が場馴れた間合いで、

「本日はおめでとうございます。」と口をきった。「耕介君に実はまだ私はあまり馴染みがないん

ですが、敦子さんともう一年もお附合いだそうで、ときに長すぎると不都合も出るのに、こうして首尾よくご婚約、本当におめでたいかぎりです。」

長谷はこのあたりから、頭髪のうすい色白の顔を、彼と母親の方へむけた。「私は長年、新聞社などにいまして、往來を歩くのは得意なんです、家庭へのご挨拶はにが手でございまして、まあ、近頃の流儀で仲人の家へわざわざお運び頂いたわけです。婚儀にもいろいろ難しい作法もございましょうが、みなさまもお煩わしいでしょうし、そのへんは適当な手順でやらせて頂きます。」

長谷がこう言って丁寧に頭をさげ、となりの妻へ眼をむけると、春子は心得たようにすぐ立て、軽く一礼した。それから、まっすぐ床の間へ歩み、彼の方の片木盆のまゑに膝をついて、結納品のむきが相手側になるように、盆をゆっくり半廻転させた。

耕介は長谷夫人の動作がやや荒っぽくて、こういう役目にははらはらするところがある、と思った。しかし一見、老けて見える長谷に比べ、ひどく若々しく、留袖のような着物が似合うのにびっくりした。わずかに頸すじに、中年の脂肪がついているが、その皮膚も白くつやがあつて、この夫人はどんな素生の女性だろうと、彼はおし計った。

片木盆を胸の高さにもって、長谷夫人は敦子のまゑへ運んでいった。敦子の膝に近くそれを置くと、きちんと坐って、

「結納でございます。お改めの上、幾ひさしくご受納下さいませ。」と言った。

すると、敦子は意外に冷淡さも照れもみせず、深くお辞儀した。

耕介はその光景を見て、一瞬肅然となった。彼自身、芝居がかったことと思っていたのに、今そういう印象は、すこしもなかった。彼は急に素直な氣持になり、これが自分のずっと願ってい

た瞬間なのだ、と思った。しかし、すぐにそんな自分の心は、敦子が生真面目に嚴肅な態度でやっているからにすぎない、と考へなおした。本当は今、敦子は何を考えているのだろう。

長谷夫人は靜かに自分の座に戻った。すると、克三はこんな結納式に馴れているらしく、無表情な伏目のまま、率先して疊に両掌をついて礼をした。長谷夫妻をのぞいて、みながそれに習った。

克三は背中を起すと、となりの敦子の方へわずかに眼ませした。その途端、敦子は躊躇^{ためら}わずに手を片木盆の上へのばして、目録をとりあげた。彼はこの父娘二人の呼吸に驚いた。敦子はこんな形式を厭がっていたのに、この様子では、父親からあらかじめ教わっていたようではないか。彼は今しがたの、高揚した氣持が不意に萎えしほみ、克三が憎らしくなった。

敦子は目録の包みをひらき、なかから巻紙をとり出した。それから、いったん包みを丁寧に疊んで、膝のわきへ置くと、巻紙を両手でひらいて眼を通し、すぐ元のように折り戻した。これがすむと、疊の上へ置いて、そっと下座の姉の方へ押しやった。姉の岐代はそれを手にとって、また眼を通すと、再び敦子の方へ戻した。敦子は巻紙を目録の包みにゆっくり収め、片木盆の上へ置いた。

彼はこの動きを、狎れ合いをみるような氣持で見まもったが、しかし眼は、敦子のたえず動く腕から離せなかった。それはふだん「オンボロ車」と自称する旧型車のハンドルを握ったり、英文タイプをたたいたりする腕と、ひどく違っていた。目録の包みを開き閉じるたび、杏色の袖から現れる下膊部は、ふだんの陽灼けた色も見えず灰白い影で泳いで、動作ごとに、柔かく袖の裏がまつわり、離れた。彼はそれを見ると、今まで一度も相手に感じたことがなかったのに、敦子は案外みだらな女かも知れない、と思った。

耕介は少年の頃、そういう若い娘の着物の腕を、ちよと微熱の中のような憧れで眺めたのを思い起した。まだ、七八歳の頃で、家の中で会う娘が、どういう種類の女なのかも正確には知らず、またそんな女たちが何人もくる家それ自体、どういふものかも理解せずに、その娘に会うのをよく待っていた。

相手は十七ぐらいだろうか。着飾って茶の間に坐っていると、帯留の下に錦繡のお守りと香袋をさげていて、そばに寄るとその女だけの特別な匂いがした。子供の自分には、いつも優しい口をきいたが、たぶん眼中になかったのだろう。いつも眼を遠くへ投げるような顔をして、坐っていた。そういう時、女の指はたえず無意識に髪をなおすとか、襟をかき合せるとか、ハンカチで唇を押えるとかしていて、そのたびに、重そうな絹の袖口から、細^ほっそりと青白い腕が見え隠れした。

二年後には、娘はどこへ行ったのか、家へこなくなったが、その頃自分はもう少し環境がわかるようになり、女たちは「芸妓」と呼ばれることもわかった。母の栄子が祖父から、そんな家をついでいたが、東京の旧市内のかなり格式がある土地柄のせいとか、よく軍人や役人が出入りした。敦子が結納を受けおわると、今度はこっちが受けとる番で、長谷夫人は床の間へ、もう一つの片木盆をとり立った。その後の手順は、先方の時とまったく同じだった。彼が目録をとる時、夫人が脇から心配そうに、手を貸してくれようとしたが、かえって間違えてもかまわない、という気で、手速くやってのけた。

「ありがとうございます。」

それがすむと、長谷は改めて礼をして言った。「これで結納式は滞りなくすみました。あとは何もございませんが、お祝いの膳など、召し上って頂きたいと存じます。」

言葉と同時に、春子がまた障子を鳴らして、廊下へ立っていった。しかし、奥では誰か手伝いがきて、準備などしているらしく、あまり時間をおかずに、小さな器うつわの音をたてて戻ってきた。「さあ。お父さまから。」春子が先に膳を運び入れると、つづいて十五六の少女が晴着姿で入ってくる。

「これはうちの長女ですの。将来の参考のために、ぜひ見学したいって。」

言葉と反対に、少女は硬い顔で、膳を一度二度と往復して室内へ運び入れ、すぐ逃げるように行ってしまった。

めいめいの盃へ、清酒と葡萄酒が好みに応じて注がれ、長谷の音頭で乾杯すると、

「どうもご苦労さま。」

克三が長谷の方へ頭をさげて、ねぎらった。それはやや尊大な、目下に言うような響きがあり、耕介の耳にはあまり気持よくなかった。しかし、克三はもう六十もすぎ、長谷よりひと廻り半年長で、戦中から戦後、去年の第一次池田内閣の初まりまで、役所時代にいろいろ世話をしたというから、当然かも知れない。

彼はいつも克三の大柄な、四肢も顔も腹も弾みのない肉がくっついた体軀を見ると、眼をそらしたくなる。しかし、いつの間にか、自分の視線はその方をむいている。克三の声が奇妙に低く、よく注意しないと聞きとれないので、思わず顔をみると、いつも肉の奥にひっこんだ眼が優しげに笑いかけているからだ。そうしてつくづく眺めると、その鼻梁も唇も、すべて大まかで配置よい顔は、人目を惹く感触がなくもない。今も資源開発の営団の常務理事や、いろいろな役職を持って、幅をきかせていることが了解できなくもない。

「耕介君は外務省にもう五年もいるんですよ。」克三は長谷に言った。

「そうですね。」

長谷はそんなことはとうに知っているという顔で、こっちへ笑いかけた。

「大学にいる時分に、就職してますからね。一種のアルバイトで。」克三の声はほとんど感情のない、低い響きで、かえってこっちの耳をひきつけた。

「ところが、まだ一般の公務員の上級試験も、外交官試験も受けないんですよ。せめて領事官資格でもとったらいいい、と言うんですがね。」

「ははあ。」長谷はこの席で、そんな話題を避けたいらしく、●曖昧に頷いた。

「しかし、耕介君のやっている調査室の仕事は、おもしろい分野ですな。」

「いや、僕のはただの事務的な仕事です。」彼は言った。

「しかし、古い資料の保存について、いつか新聞に書いてたでしょう。」

「ええ、ちょっと紹介を頼まれただけです。」

彼は長谷が自分を立てようとしているのを、鬱陶しく感じた。克三の言っていることは、この場にいる人間に知れきっている事実で、克三自身今さら非難しようとしているわけではない。だが、自分に馴染みの浅い長谷は、それを^{いた}勞^わってくれている。それは克三と——おそらく長谷とも、価値の感覚の違う自分には、どうでもいいことだ。

けれども反面、克三はそんな些細な言葉の石を投げて、自分の^う反応^をを長谷に見せようとしたのかも知れない。克三はそういうことも考えかねない人間だ。とすると、それは敦子との結びつきにも響きかねない。

耕介は今結納を交したからと言って、自分が敦子と結婚できると思っていないのを、初めて意識した。克三は最初から乗り気でなかったこともあるし、敦子自身にも障害はある。敦子という、

考えてみればたか一人の——それももう二十六歳の、娘を自分のものにしようとするにしては、妙に深く不可解な道だ。けれども、自分は今さらひき返さない。これはどこからくる意思なのか、いわゆる「愛」とかいふものなのか、もっと違う背後の力なのか、自身でもよくわからない……。

「敦子さん、どうしたの？ そんなに駄をかしげて。」

長谷夫人が自分の座から声をかけた。

「どこか、おわるいの？」

「いいえ。足が痛くなっちゃって。」敦子は眉をよせ、駄の重心を移して、右膝をやや浮かしながら言った。

「ふだん、お行儀が悪いものだから。」

敦子の言い方は、全身がたっぷりと成育して、動作も活潑なのに、声が乾いて呟くようなので、かえって座に笑いが起った。このちぐはぐな感じを、耕介はよく不思議に思うことがあった。まわりに笑いが拡がって、彼だけ笑わないせいとか、敦子は願（ねが）をつき出して、こっちを見た。オリーブ油を刷いたように滑らかな肌に、薄く静脈が浮いた顔は微笑しているが、眼だけ脅えたように生真面目だった。

「敦子さん。じゃ、ほかのお部屋でお休みになったら。」

母の栄子が氣遣って言うのと、克三が、

「いい、いいんですよ。このくらいのこと、我慢しないと。」と言葉をはさんだ。「みなさん、まだお膳も上ってないようですよ。失礼ですよ。」

克三の低い声には、つよい響きがあり、敦子は急に駄の力を脱いたように、膝をそろえ、陰気な眼で黙りこんだ。

一瞬、室内に気まずい空気が流れた。すると、克三はそれを救うように、「敦子は子供の時、早く母親を亡くしたもんで、私が少し甘やかしたようです。この姉は、母親の顔もよく知ってるし、そんなことないんですがね。」

しかし、こんな話は、まわりの空気をひき立てる力にならなかった。何となくみな視線が岐代に集るなかで、彼もあまり馴染みないその姉を見つめた。岐代は困ったように眼を伏せていたが、その顔はよく見ると、敦子より整っているほどだった。ただ顔色がわるく、服装も地味すぎた。自分より七八歳上か、まだ三十半ばぐらいだろう。敦子と齡がかなり違うが、その間に幼時に死んだという長男がいたらしい。神戸の商社員に嫁いでいて、子供もなく、夫が海外出張で留守の時など、東京へやってくるらしく、自分も前に顔だけは合せたことがある。

「しかし、家内からおもしろい話を聞きましたよ。」

長谷は機敏に、また座の話題を変えるように言った。

「耕介君と敦子さんは、子供の時にも一二度会ってるんですってね。」

「うん。」克三は曖昧な声を出した。

「いや、ほんのちょっとです。」長谷が自分の方を見るので、彼はやむなく答えた。本当はこういう古い話も、いい話題とは言えなかった。

「敦子さんのお父さんと、僕のお袋は昔からの知り合いですから、子供の頃、一度だけお宅へ一緒に行ったことがあるんですよ。」

実際はあの頃、克三は母の家へよくくるお客だったのだ。たしか企画院と呼ばれた役所の上級官で、同僚や代議士らしい連中と始終きていた。懇意な客はときどき帳場へも下りてきて、母と話しこんだりするので、子供の自分はそんな克三を見た覚えがぼんやりとある。その頃の克三へ